

⑤ 『出家』

急いだつもりだったのに、渡しは既に橋本川の中ほどまで進んでいた。次は夕方に一往復あるだけだ。

お城はすぐそこに見えているのに、城下に向かうには橋本橋を迂回する以外に方法は無い。半時は余計に歩かなくてはならないが、仕方の無いことだった。

目指す清光寺はすぐに分かった。さすがに、本藩より寺祿を与えられているだけの事はある。堂々とした伽藍は、しばしミチのまなこを釘付けにした。

「ようこそ拙寺をおたずね下さった。あなた様のことは、羽仁様よりうかがっておりますぞ。何の遠慮も要りません。どうぞゆっくりおくりつろぎ下さい」と老師は言いながら、大きな体を持って余すようにゆっくりと折りたたみ、本尊を背にして座った。

「夕方には、羽仁様にこちらへ来ていただくよう使いを出しました。それまでに少しお聞きしておきたい事が有りますが、よろしいですか。」そう言つてミチの目をじつとみつめ

「涼しいお目をお持ちじゃ」と呟いた。

両親が浄土宗なのに何故浄土真宗の寺を訪ねて来たのか。仏に仕えようと云う考えに到った訳とはいったい何なのか、と二つの理由を尋ねた。

言葉使いは穏やかで、答えを急かせる様子は微塵も無いが、熱心な質問の裏側には、厭世観に囚われ簡単に世捨て人になる事などは断じて許さないぞ、と云う言外の圧力が感じられた。

ミチはその迫力の前に、たじたじとなりそうだったが、包み隠すことなく、全て本心を打ち明けた。

十六才で利之助に嫁いだ。嫁いだのも、村の世話役が身分の違いを承知の上で、死にも狂いで父由永を説得した結果だった。

世話役にしてみれば、本当は村のために力になってくれる由永に、ずっと田耕に居て欲しかった。

しかし、藩元より長府へ出仕の沙汰が有ったのであれば、もはや覆すことは出来ない。せめて娘のミチ殿が村の衆と結婚してくれるなら、由永様も田耕のことを忘れはしないだろう。

世話役の遠謀に乗せられた形で利之助のもとに嫁いだミチではあつたが、利之助との八年間は、日々がこの上ない幸せに溢れていた。

その大切な八年間を完全に封印してしまうには、総ての煩惱を捨てること、再嫁など全く論外であった。

ただ一つ、利之助と八年間を共にした証しに、同じ宗門に身を置き修業を積むことが最良の手段だと考えた。

これからの人生は、俳道と仏道に勤めること、その為にこちらのお寺で得度をお願いしたい、との思いを、ミチは切々と聞心院老師に伝えた。

「まことに揺るぎの無いご決心のようすな」ミチを見据えたまま話を聞いていた老師は深く頷くと、やおら本尊に向き直り、堂全体を揺らす響きのある声で読経を始めた。

下城の時刻を待たずに羽仁は清光寺にやって来た。萩藩藩士であったが、俳諧美濃派の中心人物、竹奥舎其音の名の方が、この地では通りがよかった。

父由永とは予てよりじつこんである事、聞心院様のお許しがあれば、すぐにでも美濃への添え書きを準備しましょう、とミチに伝えた。

「三日後であれば後見人として羽仁様にも立ち会っていただけ。その日を入門の日としましょう。それまでは拙寺でゆつくりされるとよいでしょう。愚僧も羽仁様の御指南を受けながら、まずい句を詠んでおります。明日は是非皆様にお集まり願ひ、ミチ殿の歓迎句会を催すことにしましょう。ところで、ミチ殿は俳号をお持ちかな？」

「はい。長府の只山先生より、菊車、の俳号をいただいております」

「なるほど、風ぐるまのようにくるくる回るあなたの頭脳を見極めた俳号すな。いや、よい名です。これよりは同好

の士同士、菊車殿とお呼びしましょう」

そして三日後、ミチは髪を落とし、俳道と仏道への確かな一歩を踏み出したのだった。